

Network

Practice of Network

1

取材日：2017年7月26日



リウマチ



糖尿病



東京都区西北部医療圏

リウマチ医療における半世紀以上の実績を礎に マルチ機能型病院として地域連携にも貢献。

Point of View

- ① リウマチ性疾患のネットワークで、地域の大学病院や基幹病院と地域の診療所との間に位置しハブ機能を担う
- ② 急性期～回復期リハビリテーション～介護療養まで、グループ9病院の多機能性を生かして地域のニーズに応える
- ③ リハビリテーション部門での豊富な人材活用、地域包括ケア病床の展開、糖尿病医療への注力を地域にアピール

医療法人社団慈誠会理事長／
上板橋病院院長
小出 純先生

医療法人社団慈誠会上板橋病院
副院長
細野 治先生

医療法人社団慈誠会上板橋病院
内科部長
今井 富彦先生

医療法人社団慈誠会
リハビリテーション部門総括主幹
福永 丈樹氏

医療法人社団慈誠会上板橋病院
常務理事／事務長
山本 明彦氏

2つのネットワークで スムーズな病診連携を築く

上板橋病院は前身の大畑医院が開設された1953年以來の歴史を有し、1965年からはリウマチ性疾患の専門病院として地域に知られてきた。現在は慈誠会グループ（【資料1】）9病院の中心的存在で、救急患者の受け入れから多様で高機能なリハビリテーション、介護療養等、地域のニーズに即した医療を提供するマルチ機能型の病院となっているが、大きな柱のひとつがリウマチ医療である点に変わりはない。リウマチ指導医で医療法人社団慈誠会理事長、上板橋病院院長の小出先生が話す。

「地域住民からは長く、リウマチ性疾患の治療で頼りにされており、使命と責任を感じています。そこで同じ板橋区内の大学病院などのリウマチ診療部門との間でネットワークを構築してきました」（小出先生）

日本大学医学部附属板橋病院、帝京大学医学部附属病院、地方独立行

政法人東京都健康長寿医療センターと上板橋病院が中心となってつくってきたリウマチ医療のネットワークのひとつが「板橋区膠原病・リウマチ性疾患連携の会」だ。板橋区医師会に事務局を置く同会は、地域の整形外科や内科の診療所の医師と、病院のリウマチ専門医との関係形成を



左から小出先生、細野先生、今井先生、福永氏、山本氏

【資料1】

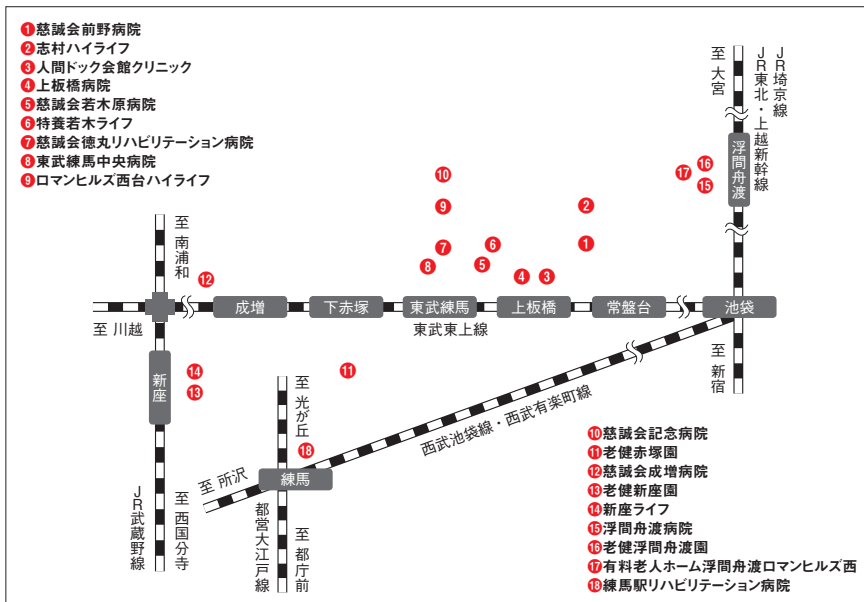
医療法人社団慈誠会の関連施設

進め、リウマチ患者のスムーズな紹介・逆紹介を実現している。

「リウマチ患者や診療所と病院の先生方に向けて年3回、講演会なども企画しています」(小出先生)

同会とは別に、リウマチ専門医同士によるネットワーク「ハイリスクリウマチ膠原病ネットワークセンター」もある。板橋区を含む城北地区や練馬区、杉並区から埼玉県南部にかけてのネットワークで、日本大学医学部附属板橋病院と帝京大学医学部附属病院を拠点に地域内の専門医をつなぎ、病診連携を促進する。

「同ネットワークでは医師と医療スタッフによるハイリスク症例の研究会なども4ヵ月に1回ほど行っており、地域のリウマチ専門医同士は皆『顔が見える』レベル以上の密な関係を築けています」(小出先生)



早期の段階からきめ細かい専門的治療を提供する体制

2016年10月に同院に赴任時、「この地域では連携が進んでいると感じた」と語るのは、リウマチ指導医で副院長の細野先生だ。

「外来で患者さんを診ていると、地域の診療所からの紹介、それも比較的軽度の患者さんの紹介が多く、リウマチ性疾患の早期にきめ細かい専門的治療を提供する連携体制ができていると思いました」(細野先生)

地域の整形外科や内科の診療所の

先生方が「リウマチ疑い」の患者を発見したなら、すぐに専門医のいる病院に紹介する。こうした連携の中で、実は上板橋病院が果たす役割はきわめて大きい。

「当院は、かかりつけ医の先生方と大学病院や基幹病院の専門医の先生方との間にあって、ハブ機能を務めているイメージです」(細野先生)

「地域の診療所の先生方から紹介されてきた中で、リウマチ以外の重大な疾患を併発しているなど、特殊な症例は、大学病院等の専門医に紹介し、それ以外の患者は、当院で継続的に診ています」(小出先生)

同院のリウマチ科で診療している月に約300名の患者のうち、板橋区膠原病・リウマチ性疾患連携の会に参加する医師からの紹介患者は7～8割にも上る。そして、コントロールが安定すると、紹介元

のかかりつけ医との併診となる場合もあり、それらを含めて継続的に通院している患者は200名ほどにもなるという。

「ハブ機能を担う当院の大きな役割のひとつは、患者さんの診療情報のきちんとした整備です。患者さんのバックグラウンドや病歴、薬歴、治療経過など、いずれの情報も病診連携では大切ですが、複数回の紹介や他の診療科での受診が重なると、一部の情報が欠落するケースが往々にして出てきてしまいます」(細野先生)

このため、主に医療ソーシャルワーカー (MSW) が他院にまで問い合わせるなどして、同院を受診するまでの情報を収集し、漏れのない診療情報提供書としてまとめ、必要なときには他の医療機関にも提供できるように整備しているという。「病診連携においては、MSWの貢献度は非常に高く、感謝しています」(小出先生)



【資料2】

リハビリテーション室



【資料3】

糖尿病教室の様子



急性期から療養や介護まで グループ内で継続した治療

「地域の病院の存在意義には、患者さんを生涯にわたって見守ることが挙げられるでしょう。その意味で、信頼できる医師との間で、タイミング良く紹介・逆紹介が可能な連携ができていく環境は、非常にありがたいですね。

また、当院の場合は同じグループ内に回復期リハビリの専門病院や介護療養病床があるので、患者さんやご家族の希望に応じて速やかな転院が可能です」（細野先生）

リウマチ性疾患に限らず、患者の高齢化が進むにつれ、急性期を脱したからといって即、地域の診療所へ逆紹介、在宅医療へ移行とはいかなくなっている。その点、慈誠会ではグループ全体で、患者を生涯にわたって見守る医療体制を構築しているようだ。

「当院は急性期を預かる一般病床以外に回復期リハビリ病床、医療療養病床、地域包括ケア病床を備えるマルチ機能型病院ですが、当グループ内では東武練馬中央病院と浮間舟渡病院も同じマルチ機能型です。そして、慈誠会徳丸リハビリテーション

病院は106床、練馬駅リハビリテーション病院は150床の回復期リハビリ病床を持つリハビリ専門病院。加えて、慢性期を診る4つの介護療養型の病院もあります」（小出先生）

グループ内の病院への転院となれば、医師同士あるいはリハビリのセラピスト同士の関係は深く、患者は安心して治療を続けられる。

「当グループの9病院は、板橋区と練馬区にありますが、さらに埼玉県まで含めたエリアに介護老人保健施設、有料老人ホーム、介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）、ケアハウス、訪問看護ステーションなどの保健・介護・福祉施設があり、全部で約20の医療・保健・介護・福祉施設を擁する体制となっています」（小出先生）

医師だけでなくリハビリの セラピストも地域内で連携

上板橋病院及び慈誠会グループは近年、地域密着型でシームレスなケアを提供すべく、リハビリテーションの充実にも取り組んできた（【資料2】）。慈誠会リハビリテーション部門の総括主幹を務め、慈誠会徳丸リハビリテーション病院リハビリ

テーション科技師長でもある作業療法士の福永氏が語る。

「慈誠会徳丸リハビリテーション病院と練馬駅リハビリテーション病院は、回復期リハビリの専門病院としてグループ外からも患者さんを幅広く受け入れています。もっとも多いのは脳卒中の回復期、ほかには大腿骨頸部骨折など運動器疾患のリハビリです」（福永氏）

慈誠会徳丸リハビリテーション病院は、2002年に板橋区初の回復期リハビリ専用の病棟を開設したことで知られ、板橋区医師会の主催する脳卒中懇話会や大腿骨頸部骨折懇話会にも積極的に参加している。

「これらの懇話会にはリハビリテーション部会やMSW部会があるので、医師だけでなく、私たちリハビリのセラピストも地域内で連携しています」（福永氏）

「脳卒中地域連携パス（東京都区西北部脳卒中医療連携検討会版）」や「大腿骨頸部骨折板橋地域連携パス」に乗った患者も、多数受け入れているようだ。

「一方、マルチ機能型の上板橋病院のリハビリテーション部門では、リウマチ患者の回復期、維持期のリハビリも多く、退院後の通所リハビリ

や訪問リハビリを行っています。

退院後の通所や訪問に関しては、できる限り入院中と同じセラピストが担当するようにし、患者さんが安心して継続的にリハビリを受けられるよう努めています」(福永氏)

国の医療政策により、回復期リハビリ病棟は現在、かなり多くなり、病床数も量的には満たされている。「これからは、高密度で質の高いリハビリの提供が今まで以上に求められるでしょう。きちんと持続できるプログラムや、高いスキルを持ったセラピスト、施設の利便性などは大切な要素です」(小出先生)

慈誠会にはグループ全体で250名以上のセラピストが在籍し、脳血管疾患、運動器、呼吸器、言語聴覚療法とそれぞれのリハビリに対し経験豊富な人材がそろっている。また、練馬駅リハビリテーション病院は全国的に見ても珍しく駅直結のビル内にあり、利便性は抜群だ。

「通院しやすいと、患者さんにもご家族にも好評です。住んでいる街、歩いていける距離で医療やリハビリが受けられるのは重要なポイント。今後も、充実したリハビリ体制と利便性を追求していきたいと考えています」(小出先生)

今後の計画は、糖尿病連携や地域包括ケア病床の積極活用

リウマチ医療とリハビリに加えて同院が将来、診療のさらなる柱にしようと考えているのが、糖尿病医療だ。内科部長の今井先生が、糖尿病専門医として語る。

「地域の診療所には、たくさんの糖尿病患者を抱えている先生方がいて中には血糖値のコントロールがうまくいかない、あるいは患者さんが治療を中断し病状を悪化させる症例も

あるようです。非専門医の先生方で手に余る患者さんは、当院も含め専門医のいる医療機関にお任せいただければと思います」(今井先生)

板橋区医師会では、専門病院や行政と協力して板橋区糖尿病対策推進会議を立ち上げ、2017年6月からは「糖尿病地域連携パスポート」の運用も開始された。リウマチ医療の連携にならって、いずれは糖尿病の連携ネットワーク活動においても、同院が存在感を発揮してくれそうだ。「その足がかりとして始めたのが、患者さんや地域住民が対象の『糖尿病教室』です」(【資料3】)。2017年6月に院内で第1回を開催し、以降は、隔月で実施しています。

また、糖尿病にはチーム医療が欠かせません。看護師、管理栄養士、臨床検査技師などの医療スタッフから糖尿病療養指導士(CDE)を育成して、しっかりとした糖尿病チームをつくりあげたいと思っています」(今井先生)

「現在、リハビリのセラピストにもCDEなどの資格取得をすすめているところですよ」(福永氏)

「医師や医療スタッフに、地域での糖尿病連携の会などへの積極的な参加を促し、病院全体で地域の先生方との連携体制の構築に向けて動いています」(小出先生)

今井先生は、さらに糖尿病診療の新たなプランとして教育入院の実施を検討している。しかし限られた病床をフル活用している同院では、教育入院のための病床確保は難しいのが現状。今後の課題となりそうだ。これに関しては、事務長の山本氏が解説する。

「2017年2月、当院の一般病床36床のうち20床を地域包括ケア病床に転換しました。同病床には、在宅復帰率70%以上など、いくつかの要件が

ありますが、それらを満たせば多様な患者さんの受け入れが可能です。

そのため地域包括ケア病床は回復期リハビリ及び療養病床の条件に該当しない患者さんの受け皿となっており、入院1～2ヵ月後の在宅復帰率は80%以上ですが、ベッドは常に埋まっている状況です」(山本氏)「地域包括ケア病床は、サブアキュートやポストアキュート、レスパイトなど用途が広いので、今後、診療所の先生方からのニーズも高くなると予想されます。糖尿病の教育入院もぜひ実現させたいので、さらなる増床を考えています」(小出先生)

糖尿病医療への注力、地域包括ケア病床の展開以外にも、これからの地域貢献を見据えた動きは多岐にわたる。小出先生からは電子カルテを導入し連携をさらにスムーズにする計画、福永氏からは「板橋区地域リハビリテーションネットワーク」での他病院のセラピストとの協働や、リハビリテーション出前講座への協力といった現在進行形の活動が紹介された。地域への貢献は同院のすべての部門における基本理念なのだ。

「当院に限らず慈誠会の施設は皆、それぞれに特色ある病院であり、保健・介護・福祉施設であると自負しています。地域の診療所の先生方や大学病院の先生方としっかり連携する中で、それぞれの施設の機能を皆さんに最大限活用していただき、ともにこれからの地域医療を支えていくことが、私たちのめざすところです」(小出先生)

医療法人社団慈誠会
上板橋病院

〒174-0071
東京都板橋区常盤台4-36-9
TEL : 03-3933-7191